

同性愛についての宗教的挑戦¹

ジョナサン・マゴネット
日原広志(訳)

私の題目は「同性愛についての宗教的挑戦」であり、私は一つのユダヤ的観点から話すことになるでしょう。このために私は少々自分のアプローチの背景的情報を〔皆さんに〕²与えておく必要があります。ユダヤ教はユダヤ民族の宗教です。これが意味するのは、宗教的信仰はユダヤ人のアイデンティティと世界観を形成する諸要素の中のはんの一つであるということです。ですからユダヤ人は宗教的観点に劣らず、あるいは〔宗教的観点〕以上に、ユダヤ人の倫理的、文化的または人道主義的観点の故に関心を持つ問題を提起することがあります。実際面で、今日欧米社会に住む多くのユダヤ人にとって、彼等の同性愛に対する姿勢は彼等を取り巻く世俗社会のそれ〔姿勢〕を主として反映しているものであり、その宗教的問題は特に重要には思われていないかも知れません。自らを宗教的であると考えようユダヤ人は一方では正統派または伝統派として、他方では改革派または進歩派として大まかに分類され得るでしょうし、そして勿論それらの間にはさらに細かい分類が存在します。これらの宗教的立場の両方共が19世紀に発生しました。それらはユダヤ人が自らの住む特定の国の個人的市民になる〔道を拓いた〕ところの、いわゆる「解放令」(Emancipation)の衝撃に対する反応でした。それ以前、ユダヤ人はユダヤ教の法が彼等の生活を定義し、管理する彼等だけの閉じた社会の中で生活していました。新しい状況において、多くのユダヤ人

1 〔訳注〕これは2016年6月16日、西南学院大学大学博物館2階講堂で行われた大学学術研究所主催の公開講演である。原題は、“The Religious Challenge of Homosexuality”。

2 訳注：〔 〕は訳者の挿入を示す。

は自らを周囲の社会に同化させ、ユダヤ的伝統を背後に残して去る自由があると感じました。そういうわけでこれら運動のどちらも、開かれた社会の中でユダヤ教の宗教的次元を保持する試みとして起こってきたのです。大まかに言えば、正統派と伝統主義者達は、ユダヤ教とはシナイ山でモーセに与えられた神の直接的啓示であるトーラーに基づいているので、真正のユダヤ人の生活を送るための唯一の道は過去2千年に亘るラビ的伝統によって与えられたトーラーの権威ある解釈に堅く立つことによってであるという見解を持っています。改革派または進歩派のグループに属する人々は、19世紀の合理主義の強調、そして聖書の歴史的起源についての、またユダヤ的伝統の連続した発展についての真相を明らかにするという探求によって影響を受けています。ですから彼等は自分自身をユダヤ教的伝統に属するものとして考えてはいますが、どのようにユダヤ教が今日の世界で表現され、発展されるべきかについては、時としてその伝統に全く依存しない形で決定を下す自由もあるものとして〔考えています〕。おそらくこれら潮流の間に中道を見出そうと努める保守的運動が存在することは言うまでもありません。私が一つのユダヤ的観点から主張したいのは、あらゆる問題に対して彼等が異なった反応をしているような時でさえ、ユダヤ人の生活のこれら異なる全次元が一宗教的なものから世俗的なものまで一二者間に相互作用を生み出し、互いに影響を及ぼし合っているのだということです。

男性の同性愛の問題を提出するにあたって、私は創世記第一章から〔導かれる〕聖書の基本原理を以て始めたいと思います。「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。』³」(創世記1:26)。人々は「我々にかたどり」「我々に似せて」の正確な意味について論じてきました。しかしその語が意味するところが何であれ、この聖書の見地においては、全ての人類は一人一人が神に由来する諸特徴や諸特性を賦与されています。それ故いかなる特別な身体的、心理的〔特質も〕またその他の人間的特質も、神の内

3 訳注：日本語聖書の引用は、特に断らないかぎり『聖書 新共同訳』からのものである。

部に存在し、神によって与えられた何かの“こだま”なのです。その上さらに、後に続く全ての人類が派生したのはこの一人の人からであるという事実は、根本的な聖書の教義を強化します。〔つまり、相手が〕いかなる人であろうと、その〔人の〕人間性、平等性あるいは神の似像性を否定することは、その創造者としての神を否定することなのです。もし私たちが神を信じていないならば、この前提を無視したり論争することは完全に合法です。しかし〔もし私たちが〕ヘブライ語聖書から派生した宗教的諸伝統の内部に〔いるなら〕、このことは基本原則なのです。同性愛の本質について、同性愛が個人的にまた社会全体によってどのように見られ、扱われるかの方法について、そして人生と世界に対する彼等の特殊な経験の故にこそ、そうした個人が私たちの知識、価値、文化、そして霊的な気づきに対してなし得るかもしれない比類なき貢献に対して払われるべき敬意についていかなる宗教的評価〔を下す場合〕においても、このことが出発点でなければならないのです⁴。

ソドムの罪とは何であったのか？

同性愛をめぐるその後の諸見解にとって主要な出発点を形作る3つの重要な聖書テキストがあります。二人の男性の間の性交の禁止とその罰則を記したレビ記18章22節と20章13節、そしてソドムとゴモラの都の住人達の振る舞いについて〔記した〕創世記19章4-16節の物語〔の3章句〕です。私は先ず後者のテキストから扱いたいと思います。なぜならそれ〔ソドムとゴモラ物語〕についてのキリスト教の教えは中世以来強力で、否定的な影響を同性愛に対する姿勢の上に及ぼし続けてきたからです⁵。

ちょっと背景を思い出してみましょう。〔先ず、〕創世記18章において神は

4 性の問題に対するユダヤ教の姿勢についてのさらに広い見解については、Jonathan Magonet (ed.), *Jewish Explorations of Sexuality* (Oxford: Berghahn Books, 1995) 参照。

5 この影響史については Mark D. Jordan, *The Invention of Sodomy in Christian Theology* (University of Chicago Press, 1998) 参照。

アブラハムに、自分がこれからソドムとゴモラの諸都市をそれらの一明示されていない、しかし明らかに重大な〔何かの〕一罪を理由に、滅ぼすつもりであることを告げます。アブラハムは、その中にいる罪無き人々のためにそれを免れさせてくれるようにと嘆願します。〔そして、〕19章で、二人の「御使い」がアブラハムの甥ロトを来たるべき破滅から救うためにソドムへ赴きます。明確にしておくべき第一の点はヘブライ語の術語“マルアーフ”「使い」は通常人間の使者を、そして時々神の使いを言及するために用いられるものだけということです。その語のギリシア語訳“アンゲロス”が特別な外観を伴った存在としての天使のイメージの発展を導きました。より後代のこの伝統は時々聖書物語の理解の仕方について混乱を引き起こします。なぜならこれらの使い達は、普通の人間として彼等と遭遇した人々の前に現れたのかも知れないからです。ロトはまれびとに手厚いもてなしを提供するというアブラハムの慣習を踏襲しながら、その使い達を自分の家の中へと招き入れます。彼等がいることを聞き知るに及んで、ソドムの男達はロトに彼等を引き渡すよう要求します。その群衆はその男性〔使い〕達を性的に虐待したがつているという暗示はヘブライ語の動詞ヤーダ「知る」を使ってのフレーズ「私たちが彼等を知ることができるように」⁶の用法に基づいています。その動詞のヘブライ語聖書中の約一千回の使用のうち、たった10回だけしかそれは性交を意味しません。そして合意の上のもの（例えば、「アダムは妻エバを知った。彼女は身ごもって…」〔創世記4：1〕）であれ、非合意のもの（〔例えば〕かの〔レビ人の〕側女に対するギブアの男達による恥ずべき集団レイプ〔士師記19：25〕）であれ、これらケース〔10件〕の全てにおいてそれ〔動詞ヤーダ〕は異性間性交についてだけ言及しています。ソドムの男達の意図は明確にその訪問者達への暴力的攻撃にあり、それはレイプを含んでいた可能性があります。しかしそうした環境での男性へのレイプはその被害者を力で制圧したことの表現の一方法なのです。異性愛的男性の想像力の中では、その被害者はその際自尊心を傷つけられ、女性の役割へと

6 訳注：講演者による。『新共同訳』では「なぶりものにしてやるから」である。

「変容」させられるのです。しかしそうした監獄や戦場において一般的な暴力は異性愛的〔志向〕の表出であって同性愛的志向の〔表れ〕ではありません⁷。そのようなわけで、その〔ソドムとゴモラ〕物語に性的要素〔を認めた場合〕でさえ、その可能性は〔ソドムとゴモラに〕合意の同性愛的行為〔の習慣があったか〕について何も語っていませんし、その代わりに、寄り辺無き個人達に対して行われる集団暴行に対する聖書の弾劾が強調されているのです。ソドムの都の名に因んだ「ソドミー」という単語の使用は数世紀に亘って、その当時受け容れ難いと考えられた様々な性的行為を無差別に言及するために使われ続けました。他のいかなる術語よりもそれ〔「ソドミー」の語〕は同性愛的行動について熟考する姿勢を悪化させてきました。それにも関わらず、創世記の文脈においては、ソドムの男達の罪は、古代近東において、また特にヘブライ語聖書において決定的な価値のあった、まれびとを手厚くもてなすという慣習を蔑ろにした点にあるのは明白です。実際、手厚くもてなすことに付随する責任こそ、アブラハムとロトによって、そしてまたメルキゼデク王（創世記14：18-20）によっても開陳されたように、まれびとや客人に対する正しい振る舞いについて〔語る〕これら複数の章における〔真の〕主題なのです。ロトは明白に言っています、「ただ、あの方々には何もしないでください。この家の屋根の下に身を寄せていただいたのですから。」（創世記19：8）と。この解釈を強化するように、ソドムの人々の行為について言及する後続の預言者的テキストが彼等の振る舞いを非難するのは、〔あくまで〕残酷さあるいは憐れみの欠如の故であって、性的実践に対しては全く何も言及していないのです。

この言葉を聞け。サマリヤの山にいるバシヤンの雌牛どもよ。弱い者を圧迫し、貧しい者を虐げる女たちよ。「酒を持ってきなさい。一緒に

7 男性による男性へのレイプはそれに伴う汚名〔を避けたいと〕の理由で過小に報告される。米国の監獄システムからの証拠及び戦場からの〔証拠〕はその加害者達が異性愛者であることを、そしてそうした行為は性的動機よりむしろ被害者を支配する一表現であることを示している。資料については https://en.wikipedia.org/wiki/Rape_of_males を参照。

飲もう」と／夫に向かって言う者らよ。．．． かつて、神がソドムとゴモラを覆したように／わたしはお前たちを覆した。(アモス4：1, 11)

お前の妹ソドムの罪はこれである。彼女とその娘たちは高慢で、食物に飽き安閑と暮らしていながら、貧しい者、乏しい者を助けようとしなかった。(エゼキエル16：49)

聖書の資料に則して、ユダヤ教のラビ的伝統は、ソドムの人々の罪を彼等の利己的行動と、特に余所者に対する残酷さの見地から論じています。実にラビ達はその人々の邪悪な慣習〔についての物語〕をこしらえるのに自分達の想像力を使うことを明らかに楽しんでます。例えば、[以下のような具合にです。] もし物乞いがソドムに来たら、彼と会った誰もが寛大に彼に金貨を一枚ずつ与えます。しかし、いざ彼がその金を使いに行くと、誰も彼には物を売ってあげません。とうとう彼が飢え死にしますと、その後、人々はやって来て、前もって各々の名を刻んでおいた自分のコインを回収するのです。[また別の話では、] その都に入るためには、人は橋を渡って4ズーズ〔古代ユダヤの銀貨〕支払わねばならず、もし川を泳いで渡ろうとする者がいれば、罰金として8ズーズが課せられました。さてこのことを知らないある来訪者が泳いで渡ってしまい、罰金を拒んだので、番人達は彼を打ち据えました。彼は裁判官に不平を言いに行きました。ひとしきり同情しながら聞いた後で、裁判官は彼に泳いで渡った廉で8ズーズ、そして彼を打ち据えるという厚意を示してくれた番人達への償いとして更なる罰金を課しました。なぜなら瀉血〔人体の血液を外部に排出させることで症状の改善を求める治療法〕は彼の健康のために良かったからという理屈です！

ユダヤ教の宗教的伝統の観点によれば、ソドムの罪は同性愛的振る舞いとは何の関係もありません。

レビ記における法

私たちがレビ記に注意を向ける時、一組の異なった問題が生じてきます。文脈の見地から、18章はエジプトの地においてまたカナンの人々によって行われていたある許容し難い慣習をイスラエルが行うのを禁じる導入句で始まります。(レビ記18:3)⁸他の人々の振る舞いからのこの分離は、対照的に、神が「聖なるもの」「分離・隔絶されたもの」であるように“カードーシュ”「聖なる者」(分離、隔絶されたもの)であるべきイスラエルの人々の特別な本質を強調するのに役立っています。象徴的に、周辺諸民族からのイスラエルのこの分離は、レビ記18-20章の間にあって山の頂上のように立つ19章においてそれ〔主に倣って聖なる者となること〕を表現することによって強化されています⁹。レビ記18章22節¹⁰は二人の男性間の性交の行為を禁じていますが、その言葉遣いのいくつかは未決のままです¹¹。その禁令は明白に肉体的な、おそらくは合意の上での行為— というのもレビ記20章13節の並行箇所では兩人共が死罪に定められているので— について言及しています。なぜそれが禁じられるべきなのかは明確にはされません。その本文にはそうした行為が「異常」であると考えられるような示唆は皆無です。その文脈が示しているのは、それがカナン人の慣習を模倣することである点であ

8 訳注：「あなたたちがかつて住んでいたエジプトの国の風習や、わたしがこれからあなたたちを連れて行くカナン風習に従ってはならない。その掟に従って歩んではならない。」(レビ記 18:3)

9 訳注：「イスラエルの人々の共同体全体に告げてこう言いなさい。あなたたちは聖なる者となりなさい。あなたたちの神、主であるわたしは聖なる者である。」(レビ記 19:2)

10 訳注：「女と寝るように男と寝てはならない。それはいとうべきことである。」(レビ記 18:22)

11 その行為は通常「あなたは一人の女と寝るように一人の男と寝てはならない」あるいは「あなたは一人の女とするように一人の男と性的関係を持つべきではない」と訳される。いずれも複数形を伴うその実際のヘブライ語のフレーズ“ミッシュケヴェー イッシャー”，文字通りには「一人の女と複数寝ること」を訳してはいない。それはおそらく膣と肛門両方の性交の可能性について言及している。ラビ達はレビ記の当該節が貫通性交と脚間性交のどちらについて言及しているのかについて議論してきた。(B. Niddah 13b)

り、性的性質についてか、それとも何らかの偶像礼拝に関係したものかのどちらか〔とされます〕。しかしボヤリン¹²は、それは祭司資料の著者達ないし編集者達のより広範な関心の見地から、つまり他の「混ぜ合わせることに」に対する禁令のケースと同様に、ジェンダーの境界線を侵害するという〔見地から〕熟考されるべきであると主張します。例えば、「女は男の着物を身に着けてはならない。男は女の着物を着てはならない。このようなことをする者をすべて、あなたの神、主はいとわれる（トーエヴァー）。」（申命記22：5）彼は以下のように書いています。

このようにある男が他の男を女性として「使う」時、二種類の種を一緒に蒔くことによって種の境界線に対する違反が生じると同様に、彼は男性と女性との間の境界線に対する違反を引き起こすのである¹³。

この読みにおいて、そのどちらも“トーエヴァー”「忌むべきこと」として叙述されている上述の2つの禁令〔異性の着物を着ることの禁止と同性愛的行為をすることの禁止〕両方の背後にある問題は、その性的性質それ自体にはなく、むしろそれが分離したままにしておかねばならない神の与えたカテゴリーを破る点にこそあります。再びボヤリンを引用するなら、

そのシステムの中で、人は二種類の種を掛け合わせることはできないし、一緒に蒔くことも、馬とろばをつがいにしたり、亜麻と羊毛を麻毛交織物に編むことさえできないのである¹⁴。

ついでに言えば、このことはまた申命記22章5節にその単語“トーエヴァー”「忌むべきもの」が登場することをも説明するでしょう。その単語こそそのレビ記の節を特に悪名高いものとし、反同性愛のレトリックに想像

12 Cf. Daniel Boyarin, 'Are There Any Jews in "The History of Sexuality"?' *Journal of the History of Sexuality* 1995, vol. 5, no.3, pp.333-355.

13 Ibid, p.343.

14 Ibid, p.342.

力と、しばしば激烈な熱情を供給してきたのです。単語“トーエヴァー”は実際にヘブライ語聖書に103回見出されます。例えば、エゼキエル書8章1-18節では偶像礼拝が“トーエヴァー”です。申命記17章1節では傷のある動物を犠牲にささげることが“トーエヴァー”です。申命記24章4節では妻を一度離縁した男が、彼女が次の誰かと結婚し、そして〔その二度目の夫からも〕離縁された後に、再び彼女と結婚することは“トーエヴァー”です。創世記43章32節では、エジプト人にとってイスラエル人と共に食事することが禁じられています。均質でない重りや杓の使用は“トーエヴァー”です。(申命記25:16) その単語は箴言に倫理的失敗の意味で25回用いられます。箴言6章16-19節は以下のものを含んでいます。驕り高ぶる目、うそをつく舌、罪もない人の血を流す手、悪だくみを耕す心、悪事へと急いで走る足、欺いて発言する者、うそをつく証人、共同体の間にいさかいを起こさせる者。同語は申命記14章3節では禁じられた食べ物を食べることに用いられます。これら他の諸々の禁止のどのの一つについても、人々があれ〔同性愛を問題視する時〕ほどの正義の熱情を以て〔聖書で禁じられているから絶対に許せないという〕説教することなど決してないのです！暗示されているのはその術語〔“トーエヴァー”〕に含まれる行為の射程を網羅し得る〔「忌むべきもの」〕より有益な言葉は、文化的に受け容れ難い何かを指す術語「タブー」であろうということです¹⁵。〔この考察でも〕再び、「ソドミー」の事例と同様に、私たちはある一つの特殊な単語の選択的用法〔に過ぎないもの〕が、いかに偏見を育み、諸見解を巧みに操作するために利用されてしまうのかを確認できます。

ダビデとヨナタン

これら〔レビ記〕のテキストに対するラビ的応答に向かう前に、ヘブライ

15 単語“トーエヴァー”の用例についての議論については Jay Michaelson in *Sh'ma: A Journal of Jewish Ideas* April 1, 2012 (<http://shma.com/2012/04/abomination-is-hate-speech/>) を参照。マイケルソンは「トーエヴァーは何らかの普遍的な欠陥ではなく、文化的・相対的なタブーである」と主張する。

語聖書中に同性愛的関係性の証拠を捜し求めようとする文脈において、しばしば議論されるもう一つの物語が存在します〔のでそちらを扱きましょう〕。すなわちサウル王の息子ヨナタンと後にサウルの王位を継ぐことになるダビデとの間の〔関係性〕です。彼等の最初の出会いをサムエル記は以下のように記します。「ヨナタンの魂はダビデの魂に結びつき、ヨナタンは自分自身のようにダビデを愛した。」そしてすぐに彼等は互いに契約を結びました。(サムエル記上18:1-3) この物語で以て一切合切の新しい熟考が生じます。先ず、その物語は彼等の間の愛情深い肉体的行為についての諸例を含んでいますが、レビ記的法の違反について記されている何の例もないばかりか、彼等の振る舞いに対する如何なる明確な非難もないのです。その上さらに、ひとたび私たちが彼等の関係性に性的次元の可能性を承認するなら、その同性愛的可能性はサウルとダビデの関係性にも考えねばならないのです。彼等の最初の出会についての記事の一つにおいて、サウルはダビデと会った時、彼〔サウル〕は「彼〔ダビデ〕を大変愛した。そして彼(ダビデ)はサウルの太刀持ちになった。」¹⁶ (サムエル記上16:21)〔とあるからです。〕彼等の軍事上常に一緒にいる間柄の親密さは、サウルの暗黒面を宥める音楽家としてのダビデの役割によって強調されます。もし単なる職業的關係以上のものがここに存在していたなら、それは確かにサウルの一部分的には合理的だが概ね非合理的な—ダビデの野心に対する恐れにもう一つの次元を加えたことでしょう。そのサウル、ダビデ、そしてヨナタンの「三角関係」はダビデを愛するサウルの娘ミカルによってさらに複雑なものとなります。〔ミカルの〕愛は後に憎しみに似たものへと変容することになりますが。(サムエル記下6:20-23)

私たちは言語上ヨナタンとダビデの間の感情的なしかし政治的でもある関係性について直截に語り出しそうなテキストと共に残されます。しかしそれ

16 訳注：講演者による。『新共同訳』の同節は「ダビデはサウルのもとに来て、彼に仕えた。王はダビデが大層気に入り、王の武器を持つ者に取り立てた。」(サムエル記上16:21)である。「愛した」とせず「大層気に入った」と訳している。

を超える部分については、それ〔テキスト〕は口が重くなります。それが本人あるいは編集者の検閲を経ているからか、またはそれ以上記録すべき何ものも存在しないという理由からかは分かりません。そういうわけでそのテキストを、彼等の感情的そして肉体的関係性の中に真の同性愛的深みを隠しているものとして読むことは全く合法的です。しかし同様にまた、その物語を単にある種の相互尊重、敬愛として、あるいは戦友の間や、新興国に破滅をもたらしかねない潜在的闘争を回避しようと決めた政治的指導的責任を有する人々の間に存する愛情として理解することさえも等しく合法的です。たしかにサウルとヨナタンを悼んだダビデの哀歌「あなたへの私の愛は女の愛より素晴らしいもの」¹⁷(サムエル記下1:26)は友への愛の詩として読まれ得るものです。しかし同様にそれは王位継承者としてのダビデの地位を確固たるものにする目的でなされた一種の賢い政治的レトリックとして読まれることも可能なのです。

しかしそうした曖昧さは正しくサムエル記のこれらの物語の文学的特質の優秀さを証明するものです。ダビデとヨナタンの関係性の見地からどちらの道を決定しようと読者の個人的見解として残されるのがせいぜいです。その素材は余りにも曖昧過ぎていかなるイデオロギー的また神学的体系にも確固たる基盤を提供できません。しかしこれらの物語が確かに提供しているのは、聖書がきまり悪さも審判〔の意図〕もなしに記録し得た男同士の感情的関係性というものが存在し得るという現実の受容です。彼等の関係性についてのラビ的判断は、2世紀以降のラビ的格言の集成である『父祖達の教訓』の中に見出されます。

「もし愛が何らかの利己的原因に依存しているなら、その原因が消失した時、愛もまた消失する。しかしもし愛が利己的原因に依存していな

17 訳注：講演者による。新共同訳は「あなたを思ってわたしは悲しむ／兄弟ヨナタンよ、まことの喜び／女の愛にまさる驚くべきあなたの愛を。」(サムエル記下1:26)であり、「私(ダビデ)へのあなた(ヨナタン)の愛」と解されている。

いなら、それは決して消失することはないであろう。利己的原因に依存した愛とは何か？アムノンのタマルへの愛（サムエル記下13章）である。利己的原因に依存しない愛とは何か？ダビデのヨナタンへの愛（サムエル記上18章）である。」（*Pirqa Avot* 5：19）

レビ記18章と20章へのラビ的アプローチ

母または父を呪うこと（レビ記20：9）、姦淫の罪を犯すこと（同10節）、様々な近親相姦の行為（同11-12節）、または労働によって安息日を破ること（出エジプト記31：15）に対する刑罰と同様に、男との性交は死罪にあたります。しかしこれら全てのケースに関してですが、ヘブライ語聖書内部においても、聖書後のユダヤ教が存続した2000年間においても、死刑は決して適用されませんでした¹⁸。何故かを理解するために、私たちは古代イスラエルの、そしてその後のラビ的な、神との関係性についての理解の基盤について見直す必要があります。シナイ山で制定された神とイスラエルとの間の契約は法的拘束力を持つ取り決めとして知覚されました。それはユダヤの民にとって有効な憲法です。それは彼等の神との関係性を、またその関係性における不可欠な要素として彼等の相互の振る舞いを決定しました。ヘブライ語聖書中に法的条項がある所では、それ等は大変重大に受け取られ、適用されねばなりません。それ故、ユダヤ教の思想と実践において“ハラハー”「法」が中心にあるわけです。しかしこのことは、聖書的法は文字通りに理解されねばならないということを意味しません。他の章句が— これらもまたヘブライ語聖書内において利用可能なものです— あるテキストの文字通りの意味と矛盾するような場合は特にそうです。これが、法的問題についての議論と決定の中へ、異なった環境において生じ得る諸価値を挿入することを許可するのです。一例は死刑の取り扱いについてのものです。ラビ達にとって人命の保護は他の全ての命令に優先します。おそらく私たちの

18 一つの例外は荒野放浪の時期に薪を集めることによって安息日を破った男の事例（民数記 15：32-36）である。

[扱っている] レビ18章の同じその章中に、ラビ達が5節の一つの宣言「わたしの掟と法とを守りなさい。これらを行う人はそれによって命を得ることができる。」を見出したということは偶然ではありません。ラビ達は付け加えます、「彼はそれらによって生きるだろう [という宣言であって]、つまり、彼はそれらによって死ぬであろう [という宣言] ではない」と。(Babylonian Talmud, Yoma 85b) 死刑は単に廃止されることは出来ません。何故ならそれは神の命令を代表するからです。しかしラビ達はそれ [死刑] が執行されるためにはどのような諸条件が満たされなければならないかを決定する際に、他の聖書的命令を利用する事が出来ました。こうして彼等は申命記19章15節の、法廷で判決が下されるには、悪事を目撃した相応の資格を有する証人2人を必要とするという節を活用できたのです。その上更に、その証人達は違反者に予め彼等の行いがどのような結果を招き得るのかについて警告していなければなりません。加えて、犯罪を犯しかねない者は自分達がその警告を聞いたことがあると認識していることも必要でした。二人の証人は法廷で別々に尋問されねばならず、そして彼等の証言に何らかの矛盾があれば判決は取り消されるのです。[こうやって] 安全装置の増加によって、ラビ達は効果的に実施上の配慮点から死刑を除去したのです¹⁹。その代わりに、ユダヤ教の伝統の見地から、この特殊な禁じられた行為に関わった人物は他の罪深い事をした者同様に、“テシューヴァー”「悔い改め」をすることが出来ました。つまり、彼は自分の禁じられた行為を止め、自分のしたことを後悔し、神に謝罪し、二度とそれを繰り返さないという固い決心をします。こうすることで、彼は神に赦されたと看做されるのです。

かの [同性愛的] 行為それ自体に関して、それへのラビ的アプローチは典

19 7年に一度死刑執行したサンヘドリン (法廷) は「破壊的に有害」と呼ばれた。ラビ・エリエゼルは言う、「70年に一度であってさえ [破壊的に有害だ]」と。ラビ・アキバとラビ・タルフォンは言う、「もし私たちがそのサンヘドリンにいたならば、誰一人処刑されなかったであろう」と。ラビ・シメオン・ベン・ガマリエルは言う、「彼等 [ラビ・アキバとラビ・タルフォン] はイスラエルに流血の犯罪者を倍増させたことだろう！」と。(Mishnah Makkot 1: 10)

型的に間接的です。それはなお協議中の特殊な例であり、多様なラビの見解が表明され、時々は一つの決定に導かれ、時々はそうではないという様相を呈しています。例えば、多くの世紀に亘って拡張されたラビ的議論の集成たるバビロニア・タルムードにおいて、禁じられた性的結合についての議論の中で、一つの見解がラビ・イエフダの名において与えられています。

未婚の男は家畜の番をしてはならないし、二人の未婚の男は同じ毛布の下に共に寝てはならない〔と言われる〕。しかし知者達はそれを許可した。ゲマラ（タルムードの中のその後の議論）に言う。その理由は何か？…彼等〔知者達〕はラビ・イエフダに言った、「イスラエルは男同士の性交についても獣姦についても疑いをかけられることはない」と。
(Kiddushin 82a)

この見解は議論の余地を残しているところです、そしてこの簡潔な交換がモーゼス・マイモニデスによる偉大な12世紀のユダヤ法の集成の中に記録されています。しかし彼は添え書きとして「しかしもう一人の男または動物から自身を分離させる者は称讃に値する」と付け加えています。(Hilkhot Issurei Biah 22: 2) しかし16世紀になると『シュルハン・アルフ』(Shulchan Aruch)〔ユダヤ教の法典〕がこう付け加えています。

そして淫蕩が流行しているこれらの世代については、男は他の男と二人きりになるべきではない。(Even Ha-Ezer 24: 1)

その裁定をめぐって最初に記した〔知者達がラビ・イエフダに説明した〕タルムード的正当化は二つの大変異なった解釈に開かれています。第一の〔解釈〕は、ユダヤの男はそもそも他の男と性交をしたりしないので、何らの疑いも起こす必要はないというものです。しかしもう一つ〔の解釈〕は、生じるであろうありがちな厄介な結果を調査することよりも、むしろそう想定してしまった方が賢明であるというものです。明らかに『シュルハン・ア

ルーフ』の著者にとっては、そうした振る舞いが実際にあるという知見はもはやこれ以上無視出来ないものでした。そしてこのことは私たちを、同性愛者のカップル (gay relationships) の開放性がこの主題に全く新しい次元をもたらしている現代へと導くのです。

今日のユダヤ教の諸アプローチ

19世紀は同性愛的諸慣習を犯罪の範疇から外すための闘争の始まりを目撃しました。それ以前は〔犯罪の枠の中で見られていたため〕重い実刑判決を導いたり、同性愛者の個人を恐喝や搾取の危険に晒すことがありました。20世紀初頭は性的振る舞いについての最初の科学的研究の時代でした。その開拓者の一人はマグヌス・ヒルシュフェルト (Magnus Hirschfeld) (1868-1935) でした。彼はポーランド生まれのユダヤ人内科医で、自身は同性愛者でした。彼は1897年に同性愛者の人権のための組織である科学人道委員会を設立しました。1910年、エマ・ゴールドマン (Emma Goldman) は—〔彼女は〕ロシアに生まれ、アメリカで活動したユダヤ人アナキストですが—「一般大衆の前で同性愛の擁護に取り組んだ最初にして唯一の女性」(ヒルシュフェルト) になりました。1919年にヒルシュフェルトはベルリンで民間の研究機関でありカウンセリング・センターでもある性科学研究所を共同設立しました。その研究所はナチスが権力を掌握後最初に攻撃した対象の一つで、そこに保存されていた数千もの記録が破壊されました。人種差別のイデオロギー、同性愛嫌悪そして反ユダヤ主義の集合は一つの危険な混合物を作り上げるのです。ヒルシュフェルトは余生をフランスの亡命地で費やしました。私がヒルシュフェルトとゴールドマンについて言及してきたのは、彼等自身はユダヤの宗教的伝統の周縁的存在だったにも関わらず、現代的価値を形作ることに於いて、また現在にまで至る宗教的諸姿勢にこのように影響を与えることにおいて、重要な貢献をした2人のユダヤ人の実例としてです。

アメリカは改革派ユダヤ教の最大の運動体である改革派ユダヤ教連盟 (the

Union for Reform Judaism (URJ) の本拠地です。それは世界中の約150万人のユダヤ人会員からなる進歩派ユダヤ教世界連盟 (the World Union for Progressive Judaism) の一部です。URJ は最も急進的なグループであり、一方欧州とイスラエルの組織はある程度支配的な正統派ユダヤ教がそれらの社会に影響を持っているために、法の適用においてより保守的である傾向があります。改革派はアメリカにおいて「預言者的ユダヤ教」と名付けられたそのイデオロギ－的基盤を見出しました。それは聖書の預言者達を、社会正義のための闘争へと献身した宗教的に傾倒した個人であると理解したからです。今日では、より初期の世代〔の改革派〕が拒絶してきたユダヤ教の伝統のより広い祭儀的次元に対する再評価と受容が起こっています。彼等の宗教的動機づけは今日“ティックーン オーラーム”「世界の修復」という術語で表現されています。「預言者的ユダヤ教」に則して、アメリカの改革派のラビ達は精力的に1960年代の黒人公民権運動に従事しました。1972年にはその運動は最初の明示されたゲイとレズビアンのシナゴグをそのメンバーシップの中に受け容れました。1977年その運動のラビ的団体である米国ラビ中央会議 (the Central Conference of American Rabbis (CCAR)) は同意した成人の間の同性愛的行為を犯罪の枠から外す法律制定ならびにゲイとレズビアンに対する差別を終わらせることを要求する決議を採択しました。1980年代後半に、その運動はゲイとレズビアンの学生をラビ養成のための神学校、ヘブライ・ユニオン・カレッジ-ユダヤ人宗教研究所 (Hebrew Union College-Jewish Institute of Religion (HUC-JIR)) で公然と受け入れました。(ロンドンでは、レオ・ベック・コレッジが、独自に、ほぼ同時期に類似の決定をしました。) 1996年に CCAR は同性の民事婚を認める決議をしました。2000年までに彼等は〔以下の〕声明を出す用意がありました。「私たちはこれによって、ユダヤ教徒の同性カップルの関係性は、ふさわしいユダヤ教の祭儀を通じて、肯定される価値があるということを決議する」(この注意深い言葉遣いによって彼等は「結婚」の語を使うことを避けたかったのです。なぜならどこまでその儀式はノーマルなユダヤ教の結婚式を模倣すべきか、あるいは全く区別される〔スタイルを模索す〕べきかについて継続中の議論があったた

めです)。しかしながら彼等はまた〔現場のラビが〕そうした祭儀の司式を務めるべきか、辞退すべきかの選択については、ラビ達各人の決断したことを尊重するという事も注記しました。2000年にその神学校〔HUC-JIR〕は「HUC-JIRの学生達が同性愛嫌悪と（異性愛主義者による）同性愛への偏見に挑戦し、根絶するのに役立つために、言い換えれば彼等が出会うコミュニティをLGBTのユダヤ人を排除せず歓迎する〔コミュニティ〕に変革できるためのツールを学ぶために、彼等にレズビアン、ゲイ、バイセクシュアルそしてトランスジェンダーの問題について教育する」²⁰ 目的で「ユダヤ教・性的志向と性自認研究所」(the Institute for Judaism, Sexual Orientation and Gender Identity)を設立しました。運動内での多年に亘る議論と厳しい自己反省という犠牲を払ってですが、わずか50年で〔同性愛に対する〕姿勢と実践におけるこれらの急進的な諸変革が受け容れられ、そして規範的なものになってきたのです。

改革派あるいは進歩派の全ての運動の資質は、ある意味では重大な同時代的問題に進んで取り掛かろうとする彼等の意欲から生じています。また特筆すべきことは彼等の諸革新がユダヤ教のより伝統的な諸派によってどれほど多くの批判や非難にさらされたとしても、ゆっくりと時間をかけてそれ等〔革新〕の多くはより広く受け容れられるようになっていくということです。しかし〔裏を返せば〕彼等の行動の自由さは、彼等の闘争が伝統的教えを相手にすることは少なく、より広い社会の中にある文化的姿勢と偏見とを相手にすることがより多いということを意味しています。対照的に、正統派の世界はユダヤ教の伝統の重りによって、またユダヤの宗教法の規範内部で運用される必要によって束縛されています。しかし同性愛の事例においてさえ、個々の同性愛者への〔正統派の〕姿勢には諸変化が見られるのです。他の男との肉体的性交の行為は、ユダヤ人が自らを殉教へと供することを欲するかもしれない諸状況を限定しようとする試みの中で中世に現れた法律の下に今

20 https://en.wikipedia.org/wiki/Homosexuality_and_Judaism page 11.

なお分類されています。より具体的に述べれば、もし敵がユダヤ人に対して、ユダヤの法に違反するような何かを行うよう強制してきたならば、彼〔そのユダヤ人〕は殺されるよりはそれを行う心づもりでいるべきである。但し、それらを行うくらいならいっそ死んだ方がましであるようなある特定の行為群の場合を除いて〔の話であるが〕。この一般原則“イエハレグ ヴェ・アル ヤアヴォール”「違反させるよりも死なしめよ」の下に〔置かれた〕、これら〔ある特定の行為群〕は殺人、人前での（他人を墮落へ導くので）偶像礼拝、姦淫、近親相姦そして同性愛的行為〔まで〕を〔今なお〕含んでいるのです。

現代の時代において正統派のラビ達は同性愛を例えばある種の病気に由来し、それ故介護と支援を必要としている苦しみとして分類しようと試みてきました。より最近になるとそれは一つの「志向」として言及されるようになってきています。明白に社会の〔同性愛に対する〕姿勢の中に〔確認できる〕その変化と、最近何人かの正統派のラビ達が「ゲイ」としてカムアウトしているというその事実は、特に自らを「現代正統派」(Modern Orthodox)とみなすラビ達を新しい観点に導いています。かの Hod 機構²¹ から2008年にイスラエルの正統派共同体の指導者達に配られた公開状は、喫緊に取り組みられるべき多くの原則を列挙したものでしたが、そこには以下のものが含まれています。

男性間の肛門性交〔だけ〕がトラーで禁じられている。そして同性愛的志向〔それ自体について〕は〔トラーには何ら言及されて〕いない。

21 Hod は正統派ユダヤ人による〔正統派ユダヤ人〕のためのイスラエルの機構である。その目的は「宗教的ゲイの男性がもはやこれ以上無視されることなく、その宗教的共同体の一部として正当な評価を獲得するために、その宗教的共同体の中で指導者達、ラビ達の間、ハラハー的かつ社会的両方の射程を包含しつつ、公開の対話を開始させること」である。(https://en.wikipedia.org/wiki/Hod_(organization))

私たちはそうすることに興味を持っている人には、治療法の種類や、成功の可能性と危険性についての完全な情報が提供されているという条件で、[同性愛の‘治療’に取り組む] 公的資格を持ったメンタルヘルスの専門家に相談するようアドバイスできる。

同性愛の男性は結婚するよう強制されてはならない。なぜなら結婚は自身の性的区別と戦っている者に何ら本来的解決を提供しないからである。…人間が結婚を引き受けられるかは「産めよ、増えよ」の命令を進んで成就する用意があるかということを含むだけではなく、配偶者との健全で道徳的な関係をなんとか処理する適応力もまた[含むからである]。

同性愛者は宗教的共同体のれっきとした一員として承認されるべきである。…彼は他のいかなる人とも異なった仕方で扱われるべきではない。

2010年に先任のアメリカの正統派のラビ達から〔出された〕もう一つの同様な文書は以下の文を含んでいました。

私たちは秘密のまま留めておくことを願う個人の「秘密を暴露すること」に対しても、自身の志向を公にしたいと願う者にそれを隠しておくよう強要することに対しても、倫理的かつ道徳的理由で反対する。

共同体は同性愛者として活動するユダヤ人の養子となった〔子供達〕、ないし生物学的な子供達に対して、シナゴグや学校などの場で、気配り、受容そして十分な抱擁を示すべきである。

アメリカでは5月は全国里親月間です。〔丁度〕この講演の執筆中に“ウーリーレ・ツェデク”「正統派社会正義」と呼ばれる一機構がパンフレットで以下の発表を行いました。

LGBTの両親が全ての点において両親として全くふさわしいことを示すあらゆる証拠にも関わらず、差別が私たちの里親・養子制度の中には沢山ある。そうした差別はこれから里親になろうとする〔同性愛の〕者も傷つける一方で、最も傷つけられるのは〔ゲイカップルの許へ引き取られ養子にしてもらえる機会を偏見によって奪われ〕毎年毎年〔一時扶養者である〕里親〔から里親へ、また該当する里親がいなければ施設へ戻され、結局この制度の中〕に留まる事を余儀なくされている子供達なのだ。子供達がより容易に―より困難にではなく―温かい家庭を見つめられるよう共にオバマ政権に要求しましょう。

そうしたアピールが正統派ユダヤ教の機構から〔出されるなど〕2-3年前でさえ考えられもしなかったことでしょう。

自宗教を防衛するための論から肯定的断言へ

ユダヤ教共同体内部にそうした急進的な変化に対する抵抗が残存しているとはいえ、これらは顕著な前進です。世界的な観点から、同性愛的行為を犯罪の枠から外すための闘争と、ゲイに対する個人による、そして世界の多くの場所では国家それ自体による迫害を阻止するための〔闘争〕はまだまだ長い道のりです。もし私たちの神への信仰が、苦難の中にある人々を支援し、それ〔苦難〕を緩和するために働き、そして明らかにそれ〔苦難〕を悪化させるようなことは何もしないということを私たちに要求するのであれば、そうした虐待の被害者であるLGBTの人々に代わって〔闘争に〕従事することは、全ての宗教的共同体にとって着手すべき務めなのです。

私は自分がこの講演で専ら男性の同性愛だけに焦点を当ててきたことを自覚しています。女性の同性愛という主題、また女性の性的特質と役割が伝統的なユダヤ教の諸資料内部でどのようにみなされてきたかという〔主題〕は、それらを正当に評価するためには〔別の〕独立した十分な長さの講演一本分

を必要とします。今日のユダヤ人の生活における最も偉大な変革は、私たちユダヤ教の伝統の内部に墨を築いた家父長制社会に対する女性達の運動によって起こされた諸挑戦を通して起こっています。そして私たちはこの新しいジェンダーの気づきをもたらすであろう諸変化の重要性をようやく理解し始めたに過ぎないのです。

同性愛についての宗教的挑戦という見地から、私はいろいろな要素を一覧に示すつもりです。それらはつまるところゲイの人々の人間性を無条件に認め、宗教的諸伝統が彼等を追放者かそれより悪い者として定義してきたやり方は正しくなかったという事実を承認し、彼等が属することを選んだいかなる宗教的共同体においても彼等をれっきとした一員として歓迎する要求を含むものです。ユダヤ教の内部においては、様々な宗教的運動が、自らの伝統と支持層によって負わされる機会と束縛の内部で行動しつつ、過去の諸見解を再検証し、新しい機会を開拓するための大きな一歩を為しています。ゲイとレズビアンへのラビへの任職 — 言い換えれば、彼等にユダヤ教共同体内部に権威が見出されるような地位を承認すること — は決定的な前進です。しかしながら、伝統の再評価と再鑄造 (re-casting) はまだ弁証学の一形態、宗教が急速に変化する世界の価値に追いつくための試みに過ぎません。しかし浮かび上がりつつあるもう一つのステージもまた存在します。それは今まで単に聞かれたりまたは認識されたりするためだけに闘争しなければならなかった人々の諸々の声が、彼等自身の苦勞して獲得した諸洞察と知恵をその共同体全体に提出し得る時に始まるのです。

私は英国におけるラビの同僚であり長年の友人である2人の言葉を引用することによって〔講演を〕締め括りたいと思います。ラビ・シェイラ・シュルマンはラビ的研究〔の道〕にやって来たのは〔彼女の人生の比較的〕遅い時期で、レオ・バック・コレッジに入る際、「自分はレズビアンフェミニストであるが、あなた方は私を受け容れるか！」と述べて交渉しました。限られた責任者だけによる多くの検討の後、私たちは受け入れを決めました。

そして彼女はそこから次に会衆制のラビとして成功を収め、また同コレッジでユダヤ思想の講義を近年亡くなるまで教えていました。彼女は以下のように書いています。

一人の女としての私がハラハー（ユダヤ法）を破る〔よう強いられたと感ずる〕瞬間は〔いつかと言えば〕、私が一神の像として造られ、そのために世界が創造された〔筈の〕一ひとり人間として否定されるような時はいつでも。私の経験と／または私の存在によって私の全てが定義づけられるような時はいつでも。何らかの靈的または政治的締め付けの正当化に私のジェンダーが利用される時はいつでも。そして私がどうやって誰を愛するのかと言われている時はいつでも。

もう一人は英国改革派運動に最も重要な靈的影響を与えた一人であり、また自身のラジオ放送を通じて一般大衆に大人気を博していたラビ・ライオネル・ブルーです。ラビとしての彼のキャリアの殆どの間、彼は自分がゲイである事実を隠さねばなりませんでした。そして私は彼から社会生活の中で、またユダヤ教の教えの故に彼が二重に経験したその苦しみを学びました。〔やがて〕彼にとってゲイとしてカムアウトする時が来たのですが、その時〔までに〕既に、用心深く、そして間接的に、他のゲイ達のために語られねばならない事を彼は書き終えていました。

私は子どもだった時、私はよく伝統的な朝の祝福の祈りを唱えたものだ。もしあなたが男性であれば、あなたは唱えたことだろう、「世界の王にして我らの神なる主よ、私を女に造らなかつたあなたは誉むべきかな」と。もしあなたが女性であれば、あなたは唱えたことだろう、「世界の王にして我らの神なる主よ、私をあなたの意志に従って造つたあなたは誉むべきかな」と。もしあなたが自分はゲイだと知っていたなら、あなたは長考したことだろう。なぜならあなたは、自分はお呼びでない邪魔者だと知っていたので。

〔しかし〕その祈祷書の新しい改訂版においては、今や誰もが〔同じ一文だけを〕唱えることになる、「世界の王にして我らの神なる主よ、私をあなたの意志に従って造ったあなたは誉むべきかな」と。過去の社会学の範囲を超えて行き、そして女性達と男性達、ストレートとゲイが共に神の親しき交わりの中へと呼び集められることこそが、まさに唯一の応答なのである²²。

22 Lionel Blue, 'Godly and Gay' in *Jewish Explorations of Sexuality*, pp.117-131, 131.